
恋模様、晴れ時々雨。

宮琵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋模様、晴れ時々雨。

【著者名】

Z4956Z

【作者名】

富麗

【あらすじ】

短編で、中編な…長編とは言えないような物語をたくさん書く予定です。

ハッピーハンドやバッドハンドやたくさん書けたらいいと思っています。

モノクロ 前篇

あるところ、小さな国がありました
小さな国で貧富の差はそれは大きく差がありました

あるところ、二人の男女がいました

貧富の差により男女には大きな壁がありました

男は小さな国の有力な権力者の跡継ぎで教養もありました
ですが

女の方は貧乏のどん底にいました

金のためなら女はなんでもやるような冷酷非道でした

男の、小さい時のクリスマスは暖かな家で綺麗な服で
大きな七面鳥とクリスマスパーティングにスープをおなか一杯食べ、
そして抱えきれない何個ものプレゼントを親戚や親からもらいそれは
幸せなクリスマスでした

大きなベットに大好きなおもちゃ 新しいブーツに服

男の小さな時はその少年の年なら欲しがるものは全て持っていました

女の、小さい時のクリスマスは地面凍る雪が降り積もりゴミが山積
みになる汚い路地裏で、追剥の服で

行き倒れになつた死んだ者の服などをくすねていました

おなかも空き店から何個ものパンを盗み追いかかれても逃げて暖
かい家の団らんの様子を睨んでいました

女は家族も親戚もいないのです

男は日曜日教会へミサに行くときに女と出会いました

女は美しく育ちましたが身なりはとても見ず簿らしかったのです

男は見惚れました ですが女は睨みました

女は男のような家が自分たちのような貧乏人を見捨てていると思つていました

男はこののような美しくて見ず簿らしい女は初めて見ました
女はこのように憎くて綺麗な装束をしている男を初めて見ました

男は仕事を覚えるために外国語や勉強をさらに今まで以上に難しくしました

そして男は周りからも「天才」や「格が上」など誰からも称賛されました

女は体も売り生きるためだけにたくさん罪も犯しました たくさん盗みもしました

そして女は周りからは「愚か」や「娼婦」など道行く人に虐げられました

ある日男は違う日曜日のミサの帰り、道行く女に話しかけました
「どうしてそんな身なりなのか」と。

女は笑いそしてすぐにすごい剣幕で男を睨みました
「好きでこんな生き様をしていると思つのか」と。

男は驚きました。

男の付添人は鞭を手に取りました

「殺すのなら、殺せよ。殺してくれよ。その方がもう楽だ。」

女は笑いながら言いました

それで男の付添人は鞭を振り上げましたが男はそれを止めました
女は今にも食つて掛かりそうな形相で男を睨みました
男は対象的に微笑みました

「名前は？」

「同情するつもりか」

「僕：いや俺は、同情なんて一切してことがない」

男は笑い続ける

女は舌打ちする

「名前は？俺は、シユバルツ」

「フン、名前など、無い。」

「ない？」

女は名前を与えられる前に親に捨てられたので名前など無いのです
抱かれ名前はその場でつけられる字名のようなものでした
自分に名前はない。それは存在していないを指しているものだと思つていました

「なら、俺が付けてやる。その代りに隣にいてくれないか？」
「は？」

女は驚きました

今までそんなこと言われたことが一度もないのです
追剥をし、抱かれて金をもらつたらすぐに突き放される
なのに名前を聞き、無いならつけて隣にいてほしい？
なんと可笑しな男か。

「お前の口は節穴なのか。お前みたいな男はどうぞのお嬢様とか言
われる方がいい。馬鹿か。」

「関係ない。俺が惚れたのは、少なからずお前だ。名前はビアンコ・
カンドーレ、だ。」

「ビアンコ・カンドーレ…。」

女は何回も呟きました。

「異国の言葉で曇りなき純粋な純白といつ意味だ。だがそのままではな…。そうだ。ビアンコをビアンカに変えよ。」

「…。」

女は不思議そうな目で男を見ました。男は整った綺麗な顔を笑わせてもう一度言いました

「ビアンカ・カンドーレ。俺の隣にいないか。」

「お前の思うようなきれいな人間ではない。そして名前の意味もまたたく違つ。白と、いうより光さえもない黒の方が私には似合つてゐる。」

女は俯きました

男は顔を上げさせました

「黒はどちらだらうな。」

そうして女を連れて帰りその日のうちに女は見るも美しいそこの嬢様よりも美しい娘となりました。

でも、女は怪訝そうな顔

ドレスも綺麗な髪飾りも身に着けたことがなかつたからです。頭に飾られているリボンもうつとおじく重く感じられるのです

「邪魔だ」

「でもとてもきれいだ」

女は…いえ、ビアンカは少し笑いました

シュバルツはビアンカをこの時愛してしまいました。シュバルツはビアンカの白い手袋がつけられている右手を優しく取りました、そして大広間へ連れて行き食事をさせました

女はがつつくともなく食べようとせずただじつと見つめていました

「どうして？」

「え？」

「ここまで見ず知らずで初めて喋る女にここまで優しく…優しくす

るのはなぜだ？私を殺しても誘拐しても手に入るものは何もない、
有り金も高価なものも何一つない。

「ビアンカに言つたら殴られそうだけれど、俺、いや僕がそんな金
に困つてゐる様に見えるかい？」

「そうだな…困つていたらこんな服、とつくに売つてゐるだろ?」

「

ビアンカは笑いました。

ビアンカも自分の心情に驚きつつありました。

今まで、優しくしてくれて隣にいる、そして名前を付けてくれた
人。

だからこそ、どうしてだかが分からなかつたのです

「でも一層分からない。何故、私を、誘拐した？」

「誘拐だなんてとんでもない。」

「だつて…。そうだろ? 連れて来て手に入るのは私そのものだけだ。」

「だつて僕は君が欲しかつたから。」

「体が？」

ビアンカは笑いました。微笑みではなく、挑発的な笑顔。

対してシユバルツは真顔になりました。ビアンカは挑発的な笑顔を
止めません。大広間に冷たい空気が広がるのを感じました。使用者
も追い払い誰もいらない大広間で大きな机に豪華な食事。でも、手は
付けられることもなく冷めてきているようにも思えますが、それよ
りもまずシユバルツの心情が第一でした。

「僕は、女に不自由してはいない。」

「…ああ、その顔と財産を見れば一発でわかる。」

「でも、愛には不自由している。」

「…哲学的なことを語りうるのだな。」

シュバルツはふつと嘲笑するように顔を緩めましたがビアンカは泣いているようにも思えました

「僕に言い寄るのは金田当て、顔が目的と言つのが多いんだ。」「ほう、顔が目的だなんて素晴らしい。」「どこが。」

二人とも笑いました。冷たい笑いです。

少し間を置いてシュバルツは続けました。

「愛したのは、外見と金。僕自身の、中身ではない。」
外見。ビアンカは結構な自信家なのだな、と思つたがシュバルツの顔からしてどうやらそれは深刻らしい。

「言つておくけれど外見と金目的の話は使用人から聞いた。

むつと顔をしかめたのがビアンカは面白く感じました

「そうか？わたしは相当な自信家だ、と思ったのだが。」「シュバルツは益々不機嫌な顔をしました。ビアンカは少しやりすぎたか、と思いました。

「僕は、ただ僕自身を愛してくれる女性を探していた。」

「わたしがあなたを愛す…とでも？何か大きな勘違いをしていないか。わたしは今まで、そう、お金のためなら何でもやつて見せた。今だつてお金目的かもしれないのだぞ。それなのにあなたはそう言えるのか？」

「いや、きっとビアンカ。君なら僕を愛してくれる。君は自分でいう程ひどい人間ではない。」

ビアンカはため息をついてマナーも無視し、適当に銀で美しいフォークを手に取り近場にあつたケーキを刺して食べ始めました。
それを静かにシュバルツは見ていました。ビアンカは今にも泣きそよな顔でした。

「どうして…わかる。」

「わかるからさ。だから僕は純粋純由と言ひ合を付けた。」

シュバルツは立ち上がりビアンカのところに行きました。ビアンカはフォークと置きシュバルツを見上げました。

優しく頬に手を添え、シュバルツはビアンカの右頬にキスをしました。一つですが優しく、温かいキス。シュバルツはビアンカを見て驚きました。泣いていたのです。… そう、彼女は生きてきて今まで一度もキスも優しい言葉も… 貰えなかつたのです。ですから生まれて初めてもらつたキスと優しい言葉が胸に響き心が満たされる気がしたのです。

盗んだパンを食べた時、高価なものを盗んだとき。

その時は確かにうれしかつたのですがどこか心の中、痛く苦しく、満足するものはありませんでした

ですが今は、違いました

全てが

ビアンカは泣きました。シュバルツはただ優しく抱きしめているだけでした。

そして二人は結婚したのです。

ですが、二人の結婚を反対するものはそれはたくさんいました

最初から恵まれた結婚ではないことは二人とも知っていました
ですが、二人は幸せでした

二人とも本当に心から愛し合っていたのですから

ですが

その幸せを妬み、壊そうとする者は当然いました

そうでしょう。

身分も最下層で血縁は誰一人とおりず、外見以外は教養も何もない
のですから。

モノクロ 前篇（後書き）

後編も頑張ります！

駄文ですね…。はい、わかります。よくわかります…。

あるところにすゞい玉の輿をした女がいました
女の名は、ありませんでしたが彼女を愛した男が彼女に名前をあげ
ました

「ビアンカ・カンドーレ」

どこまでも純粹で純白と言う彼女はそれは幸せでしたが、そ
の幸せというのは一抹の物でした

路上の女と国有数のお坊ちゃん
周りは反対をしました
女は責められいやめられました
ですが女…ビアンカは、男…シユバルツをえいたら良かつたのでビ
アンカは我慢しました、それに彼女は喧騒に罵声というものは慣れ
っこでした…が、彼女は良かつたのです。そう、自分を責められる
のは我慢できましたが彼女が一番我慢ならなかつたのがシユバルツ、
彼女が最も愛する夫のことを悪く言わることでした

「本当、見る目がないわ。
「何もないじゃない。」

「まさかあんなに…そうね、おバカだなんて思わなかつたわ。」

使用人に友好関係を結んでいた家柄の娘、跡取り、たくさんから言
われ彼女の心は確実に傷んでしました

「私が、ここにいなかつたら今頃シユバルツは悪く言われやしない。

」

この思いがいつしか、ビアンカの幸せを壊し始めていました

「ビアンカ、気にするな。」

「私は……。」

ビアンカは俯きました

暖かく美味しいはずの食事も味気ないものに感じるのです
それに、ビアンカが一番に責められビアンカ自身も気にしていた事
実、それはビアンカは子供がどうしても出来ないです

「跡取りも産めないだなんて」
「何のためにいるのかしら」
「役立たずね」

「役立たず」。それはビアンカにとって最大にして最高の痛手となつたのです

あるところに大きなお屋敷がありました

そこにはまるで、そういうかの童話のようにとても美しくとても貧しい女性が嫁入りしました

ですが周りは祝福などせずに妬み嫌いました
女性は悩みました

「君にいいの？」

シユバルツの家と友好的にあつた家がその友好関係を断ち切りました

「見る目がない家といたら、こっちまで被害にあう」と。

そうしてシユバルツの家はビアンカが嫁入りしてからどんどん落ちぶれていきました

誰もがビアンカのことを「疫病神」「悪魔の穢れ」「魔の娘子」と、嫌いました。ですがシユバルツはビアンカを離すこととはしません
だんだんシユバルツも「魔の手に墮ちた」「もう終わりだ」「あの方の将来は目に見えている」など陰口をたくさん言わされました
ビアンカは耐えられませんでした

二人が結婚してから5年後のクリスマス。シュバルツはビアンカを晩餐会に呼びに行きましたがビアンカは部屋にも屋敷にもどこにもいなかつたのです

シュバルツは血眼になり必死に愛妻を探しましたがどこにもいません。ビアンカのクローゼットからビアンカをこの屋敷に連れて来た時に着させたドレスから一通の手紙が置いてありました。筆跡は間違いないくビアンカの宛名はシュバルツでした

そこにはまさに「魔の娘子」に見合つ内容だったのです

「じうせ、金田当ひよ。」と。

ビアンカが失踪してから2年後シュバルツの家は元通りまた大金持ちの家となりました

そうして人々は誰もがビアンカのことを「魔の娘子」と信じ、疑いませんでした

シュバルツも段々ビアンカのことを怨むようになってしまいました
「結局、金目当てなのか。」…と。

そして何回目か分からぬクリスマスが来ました
ビアンカはボロボロのドレスを引きずり歩いていました

7年前と同じ路地裏で追剥や盗み。ですが7年前と違っていたのは体を売らなくなつたのです

雪の上を素足で歩きその顔からは生氣も霸氣も何も感じられないのです

まるで糸の切れた操り人形のようでした 狼狽に何度も襲われたか。

体は傷だらけ、心はボロボロ

ビアンカは体力的にも精神的にも死に近かつたのです

ビアンカはいつの間にか来てしました

シユバルツと出会つたあの街路に

ビアンカは立ち止まり雪降る灰色の雲を仰きました

「ビアンカ・カンドーレ…」

その名前をつけた人もきっと今頃違う人と…

名前の意味

どこまでも純粹で純白…だつたつけ…

お腹も空いたはず 眠いはず 寒いはず

なのに何も感じない…

ビアンカは座り込みました

家からは暖かそうな光がこぼれています

ふいにビアンカは何かを感じました

路地裏から雪踏む音

ビアンカはそちらを見ました

そこには一本のナイフを持つ狼狽

だがビアンカは座つたまま

「…こんばんわ。」

ビアンカはナイフを握っている狼狽の右腕をそつと取りました
狂おしいほどの美しいビアンカの笑顔はそこで終わりました

シュバルツは日曜日のミサのためにあの7年前ビアンカと出会った
街路の前を馬車で走っていました

隣に座るは自分の子を妊娠している美しい淑女、そう新しい愛妻…

シュバルツは自然と、ビアンカと出会った街路を見ました
群がる人だかり

「あら…？なんでしょう…？」

「見に行こうか？」

「ええ…病氣で倒れていたら大変ですもの。」

愛妻と共にシュバルツは人をかき分け人が見ていたそれを見て、驚
愕しました

人だからの中中央で倒れていたのは間違いなく死んだいたのはビアン
カだったのです

幸せそうに、いやそれとも無理して笑っているのでしょうか
笑い、死んでいたのです
自分の心の臓を貫いて…

ビアンカの体の上には少しばかり雪が積もっていました

「ビアンカ・カンドーレ」の名の意味にふさわしい
白く純粹で一転の汚れもない純白の雪が…。

モノクロ 後編（後書き）

本当は、愛していたけれど相手の幸せを思い自分の幸せと生を引換にした…みたいな感じです。

墨口せ晴れるかな、（前書き）

一応、ハッピー・ハッシュのつまつで書きました。

明日は晴れるかな、

苦しいよ…と、咳いたけれど、さつと君には届かないだろ？。

新月の夜。星だけが明るく空を照らす。

真っ暗な部屋の中、電気もつけないで静かに天井を見据える。

「ショウー？」

あの子が、あの人を呼ぶ声が頭をこだまする。

その名前は…と思い、醜い自分がいることに気づき嫌になる。だつて、あたしは…あの人へ聞いたんだ。

「なんて、呼べばいいのか分からぬ。」

「ショウでいいよ。」

消したくない。

あの子は彼女？新しい？大好きって言つたのに…。あの日からもう9か月。まだ忘れられないだなんてバカ。頭を抱えこみ今日も一人で泣く。叶うことのない恋なのに…どうしてこんなにも好きになってしまったのか。人を愛するのに年齢が関係のならばさつとあたしは…。

今日も学校へ行く。あの子とショウは楽しそうにしているだろ？。それでもあたしはもう何も言えないからただ…笑うだけ。何も知らないふりをして。それでもいい、ショウが幸せならって…。それで

も苦しいから、だからあと少しだけ、好きでいてもいいですか？

一人の影を背負い、ショウと帰った道を一人で帰る。いつも繋いでいて暖かつた右手は冷たいけれどそれでも良かつた。

空を見上げる。

いつか、あたしにもまたあの頃の、いやあの頃以上の幸せがやつてくるだろう。

ショウのことも、また友達だと思える時が来るだろう。

フツと笑い、あたしは帰る。

後ろでショウとあの子の楽しげな声がした。

「あ。」

綺麗な夕焼け。

「明日は晴れるかな。」

昨日の自分より今のあたしの方がきっと大人だろう。

ありがとう、だんて柄にもないことを言ってみる。

風が吹いた気がした。

Christmas Present 前篇（前書き）

ハッピーハンドを田描しました。
クリスマス物第2弾です。

「寒いな…。」

雪を踏みつければザクザクと音がする。

気温はマイナスだ。寒いに決まっているのだがそれ以上に、藤沢輝は心が寒かった。

そういえば、明日はクリスマスだな…と、雪を降らせている灰色の雲を見上げて輝はふと、そう思った。明日はクリスマスなら当然、今日はクリスマス・イブということになる。

ああ、だから今日は皆妙にはしゃいでいるのか…。と、輝は今氣付き道行く人を見た。

子供は当然はしゃぎ、カップルはベタベタとくつついている。彼女の方はミニスカートだった。輝は可愛い、とかそういう前に寒くないのかと思った。いくらロングブーツでも寒いだろうにと、そのカップルを哀れむ目で見た。

輝は、いつもと違っていた。いつもなら彼女と一緒に今頃部屋を片付けのことも気にせず飾り付けて、はしゃいで好きでもない甘つたるいケーキを食べている頃だ。そう、さつき通つて行つたカップルのように。でも、今の輝は到底祝う気にはなれないしケーキも食べる気は起きないし友達と一緒にカラオケに行く気には見えられない。なぜか、そう輝の彼女は1年目に亡くなつたからだ。交通事故でもなく、病気でもない。そう、それは一瞬の出来事。心臓麻痺だ。突然の悪夢に輝はこの1年、現実逃避をしていたのだ。中学1年生からずっと付き合っていたのだ。今は大学3年生。中学生からこれほど付き合えるのは珍しいな、と思つた。

8年間付き合つた最愛の人が突然、亡くなつたのだ。

輝はよく最愛の人、神崎萌と行ったカフェの前で立ち止まつた。いつの間に來ていたのかは知らない。でも、入る氣にはなれない。入りたくないのだ。

思い出してしまいそうでそしたら忘れようと、いや、諦めようとしたこの1年が無駄になる。

輝は歩きに歩き、そして墓地に來ていた。…そう、萌の墓だ。こうして墓でも見ない限り無意識に、いや無意識でもない。探してしまうのだ。萌の面影を…。だから週に一度花を添え輝はここに来る。死んだ、と言つことを自分に言い聞かせるため、そして萌が寂しくならないように。

今日は、墓場には似合わないが輝は赤いバラを持ってきたのだ。2本、両方に1本ずつ。意味もあるのだ。

「萌、今日はクリスマス・イブだな。しかもホワイトクリスマスになりそうだ。」

輝は萌の墓の前で座つた。

泣きそうになるのを堪えて一息ついてまた喋り始めた。

「今日は、赤いバラだ。墓場には似合わないかもしれないけれど…意味もちゃんとあるんだ。ほら、お前が教えてくれただろ？花言葉。たしか赤いバラは…愛情、だつたつけな…。ちょっと大学生にしてはクサいか…。」

今でも覚えている萌の言葉の一つ一つ。

「お前、花言葉とかそういうの、好きだつたからな…。だから、俺、花言葉の本かつてさ、お前に添える花もちゃんと意味をつけて…買って…。」

雪が落ちて周りの雪と同化するように輝の声もだんだん細くなり墓地から少し離れたところから聞こえてくる音楽や大声で消え入りそ

うだつた。先週、輝が持つてきた花はミヤコワスレだつた。花言葉は「しばしの別れ」。また、すぐ会いに来てくれるはず…と、輝は思つていた。信じていたのだ。

輝は立ち上がり萌の墓に積もつた雪を全て綺麗に落として「また、来るからな。」と言い墓地から出た。手が冷たくて真っ赤だ。霜焼けになるかもしないな、と思った。適当にコンビニによりコーヒーを買い、特にやることもないでの家に帰ることにした。…萌が生きていれば、生きていれば…今、きっとパーティでもしているはずの家へ。

扉を開ける。当然、寒い。そして静かで散らかつている。

萌とは半同棲みたいなもので合鍵もお互い渡していたし大学を卒業して仕事も決まれば結婚しようと輝は考えいた。

冬になりアルバイトから帰つてこれば部屋の中は暖かくて綺麗になつていて。世話好きの萌がしてくれた。そうして得意の料理で温かい飲み物でも作つてくれるので。ただ、機械音痴でたまに壊すこともあつたが。

思い出せば笑えてくるし、泣けても来る。同時に後悔する。大学で結婚していたのは少なかつたけれどもいのいわけではなかつた。禁止もされていない。なら、結婚しておけば良かつた。萌と、もつともつたかった。でも、仕事もない学生で結婚すれば費用もかかる、と思つていたがこんなことならしておけば…と後悔がさらに後悔を呼ぶのであつた。

冷たい廊下を歩きリビングに入り、電気ストーブの電源を入れる。少し小さめなアパート。だが思い出だけは大きく輝に苦痛を与えていたのだった。

黒いソファに座り冷めたコーヒーを一気に飲む。

ブラックだから、苦いし冷たい。懐かしくなるのは暖かくて甘党な萌が作ったカフェオレ。甘いのは苦手だったがあの甘さだけは輝は好きだった。

「…何してんだか。」

ため息とともに言葉を漏らした。

電気ストーブが油の臭さと共に豪快な音と熱を出す。温かいはずが冷たく感じるのは気にせいか。

カーテンも開けずに薄暗い部屋の中、輝はキッチンを睨んでいた。萌がよく立っていた場所だ。

「依存、しそぎだな、こりや。」

それでも、それだけ、それほど萌が好きだったのだ。

クリスマスがこれほど最低に思えるとは。

人一人の命の重みを輝は一年、ずっと感じてきた。まるでどこかのおじいさんみたいではないかと思つた。

今年は、いやこれからは最低なクリスマスは続く。来るたびに萌を思い出す。毎日なのがクリスマスは特に。

「氣を紛らわすには…」

思いつかない。何をしようにも手がつかないのだ。外に行こうとは思わないし友達からの誘いも断る。それこそ適当な理由をつけて。早く、過ぎればいい。こんなクリスマス。最低最悪だ。

俺は萌に依存し頼りすぎていたのか。…情けねえ。男のくせに。

そういえば、と思い出す。

昔、死んだばあちゃんが言っていた。ウサギは寂しくなると死ぬ、
と。

自分がウサギなら死ぬか。輝は思つた。でも、死ねば萌に会える。
そう思つた。だが、

「怒る…な。」

4年前、萌は輝に「もし、私が死んだらどうする?」と聞いたのだ。
輝はその時「萌を追つて死ぬ。」とすぐに答えた。心から出した答え
だ。だが萌は顔をしかめて俺を怒つた。

「死なないでよ。私の分まで生きようが、やう思つてよ。」

「萌の分まで生きる…か。随分残酷なこと言つよ。」

それじゃあ、この途方もない悲しみはどうすの?これを持ちこなして生き
るのは苦痛だ。

早く夜がこれば寝れる。そうして一日が終わり、そうして一日一日
終わり、死にも近づくのだろうか。

輝はボーッとしながら、ソファに座ったまま、動かなかつた。

Christmas present 中編

萌が死に大学の成績も落ちてきている気もした。
このままじゃダメだ。

輝は立ち上がった。そうして久しぶりに料理をした。簡単に作れるカレーにして、輝はたらふく食べた。

「クリスマスが終つたら…で、いいかな。」

クリスマスまで、萌のことは好きでいる、クリスマスが終れば萌への未練も切ろう。輝はそう決めた。これでは生活も出来ない。

洗い物をして、歯磨きをして輝は早めに寝ることにした。明日はどうするか、街をぶらぶらと歩くか…そんなのは明日考えよつと思いつく大学生にしては早いが11時に寝た。

クリスマス。明日で、萌への思いは全て断ち切りつ。輝は泣きたかつたがそれを押さえつけて電気を消した。

「輝…輝！起きて…」
「んん…うるさいな…。」
「こりゃ…輝、起きろ！」
輝は目を覚ました。眠くない。何故か、その声の持ち主だ。
間違いない、7年間聞き続け愛した人の…声。

「も…ゆる…？」

半目な目を何度も擦る。夢じゃないのか。だって、ありえない。萌は確かに死んだ。

葬式にも言つて、骨を見て、墓を見て……。

強く自分の頬を輝は強く叩いた。ヒリヒリして痛い。……夢ではないようだ。

「どうして……あ、俺もしかして死んだのか？心臓麻痺でも起こったのか？いや、部屋が寒くて凍死？凍死はねえか……は？あれ？」
ヤバい、と輝は思った。
ついに自分も壊れたか？

萌は鈴のように綺麗な声で笑つた。

「死んでるわけないじゃない！……会いに来たの。」

「会いに……？」

萌の細くて小さな手が俺の頬に触れた。確かに葬式の時の冷たさではなく、温かみがあつた。

「萌なんだよな……？」

「……輝、久しぶり。」

輝は反射的に起き上がり萌を力強く抱きしめた。すり抜けない。確かに、そこにはいる。

「でも、どうして会いに……いや、嬉しいけれど……。」

俺は萌が作ってくれた朝ごはんを食べる。久しぶりにまともな朝ごはんを食べたな……と頭の片隅で思つた。

「……輝、まるで別人、だから……。」

萌の悲しそうな顔が輝にはとてもきれいに見えた。生きてるとは、言い難いかかもしれないが死んでようが生きていようが、確かに萌はそこにいた。それだけで、輝はもうなんでも良かつた。でもどうして会いに来てくれたのかが分からなかつた。

別人、萌は言つた。考えてみればそうだったな……と輝は萌がいなく

なつてからの自分を思い出した。人が見てられるような物じゃないだろう。

「それに、輝がいい子にしてたから…サンタさんからのクリスマスプレゼントかな？」

「…ククッ…なんだよ、それ。」

…笑った。

輝は、今気づいた。笑ってなかつた気がした。
萌が輝の頭を撫でた。昔、中学の時か…輝が萌を頭を撫でていたようだ。ただ萌の小さな手では大きさに動かしている。それがどうしようもなく切なく、愛しく思える。時間が、止まればいいのに。これが永遠に続けば…どれだけいいことか。それでもその願いは萌の一言でいとも容易く崩れかる。

「…でもね、今日一日しか無理なの。」

「え…？」

「クリスマスしか、無理なの。」

頭の中を強く殴られた感覚がした。

「輝、クリスマスで私のこと、諦めるんでしょう？」

「いやだっ…！」

輝は立ち上がり萌の方を強く掴んだ。

萌は死んだ。

でも、それが今はこうしてここにいる。生きないかもしれないけれど温かい。なのに今日一日で、本当にもう萌とは永遠に会えなくなる…。

「だから…」

輝の手に萌の手が優しく被される。

「今日一日、デートしよう？」

輝はいつも以上におしゃれをして萌の手を強く握った。そうでないと心配だった。今にも消えてしまうのではないか…そんな恐怖心があつたからだ。

「俺、やっぱり…。」

「私、諦めてくれるってわかつた時嬉しかつた。」

「どうして…。」

「だつて、輝…あのままだと人形みたいだから。」

泣きそうな顔が目に映る。手を握る強さを強くした。
「でも、やっぱり悲しいから会いに来ちゃつた…。私、輝以上に寂しがり屋なのかも。」

優しく笑う萌に輝は再度抱きしめた。

「どこのカップルよりも、幸せに楽しく今日一日過ごしてやるひつぱ。」

輝は強く優しく言った。萌を離して笑った。泣きたいのを抑えているから変な顔かもしれない。でも、今は笑っていたから笑った。

最初に来たのはよく一人で一緒に帰っていた河原に来た。雪が積もつている。その間からは雑草が力強く出ている。

「わあー！変わらないね。」

萌ははしゃいで雪玉を輝にあてた。

「いて！何するんだよ！」

輝は萌を捕まえて頭をグシャグシャと、乱暴にでも優しくなでた。

「やだ！アハハ！」

萌も、楽しんでくれる。輝は、萌を連れて河原を歩きながら水族館に行つた。行こうと約束してから行けなかつたところ。近場に出来たのだ。これなら一日でも平氣だらう。

イルカのショーや、熱帯魚の水槽など見ていたけれど萌が一番気に入ったのは、モノクロの水玉模様のウツボだった。萌は少しズレたところもあつたがそこがかわいくて輝は好きだった。

「口パクパクしてる！かわいい！」

ケラケラと笑いながらウツボをずっと見ている。

ウツボは岩の穴から出入りしながら口をパクパクさせていた。輝は、どこがかわいいのかいまいち分からなかつたが、萌が喜んでいるので別にいいかと思った。

お土産屋で萌はウツボの小さなマスコットを買い嬉しそうに鞄にしました。

「次、どこ行きたい？」

「お昼の時間だし…。そだ！あのお店に行こう！」

萌の言うあのお店とはよく言つた喫茶店だ。レトロでそこのオムライスが萌は大好きだつた。輝はすぐに萌を連れて行つた。

結構なスピードで、オムライスを食べていく萌を輝は「一ヒー片手に見ていた。

「食べないの？」

「ん？俺はいい。」

萌を見ていたかつた。もう会えないのなら…と。

マスターも、変わつていて萌は残念がつた。

お金を払い一度、家に帰つた。

ヘルメットを渡して萌を乗せた。

「バイクの免許、取つたの？」

「ああ。暇だつたし。しつかり掴まつとけよ。」

ヘルメットの上からポンポンと萌の頭を軽くノックするよつ撫で、バイクを飛ばした。

「どこへ行くの?」

「秘密……」

輝も強く言つた。

風や騒音に負けない元気強く萌は叫ぶよひと言つた。

30分ほど走らせて着いたのは中学校だった。部活をしてこないと
るもあり、壊かしくなった。

「わあ……ここ、輝とあつた場所……」

「どうしても、来たくて。」

高校よりも来たかったところだ。

萌の鼻や頬は赤くなっている。それがまるで生きているかのようだ。
輝は思えた。

萌の手を引いて、入りはしなかつたけれど裏門のところに来た。
「ここで輝告白してくれたよね。あの時まだ小さかったのに……」
「小さいと言つても、萌より15センチは大きかつたけれど。」
「今よりつてこと!」

確かに、伸びたけれど……と、輝は中学の時の伸長を思い出した。

166センチから、179センチか……。13?も伸びている。バス
ケ部だつたしなあ……と思ふける。それに比べて萌はあまり変わら
ず小さい。155?だ。24?も違うのか……と萌の頭に手を置く。
萌も小さいことをきにしているのかあまち小さいといつと怒るので
言わないで置いた。

もうそろそろ4時だ。水族館にいたり河原にいるのが長かったかな
…と思った。昼食を食べたのは3時ごろ。遅めだ。

次は大きなモールに行つた。

クリスマスだからか人は多い。でも、この中で一番幸せなのはきっと

とおれ達だ。輝は思つた。

萌が欲しがつた物は全て買った。…でも、萌は高価な物などあまり欲しがらず、安めなイヤリングなどしか頼まなかつた。

「本当にそれでいいのか？」

「うん！」

大きな声で答えて向日葵のような笑顔でそう言つた。

窓から外を見れば、もう真っ暗だつた。

お腹もすいて来て簡単にごはんを済ませ、俺と萌はお互い、一番行きたかつた場所へと向かうことにして、また寒い雪の降るホワイトクリスマスの中、バイクを走らせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4956z/>

恋模様、晴れ時々雨。

2011年12月25日21時45分発行